

哲學研究

第六十五號

第六卷
第八冊

思惟の心理學的研究に就いて

大脇義一

思惟又は思考の研究は是まで多くの論理學者に依り或は言語學者に依つてなされてゐる。而して前者は思惟の經驗を論理學的の立場から、即ちその中に含蓄されてゐる内在的の意味の立場から是を理解せむとし、後者は思惟の内容を最も直接に現はすものとせらるゝ言語を通して是を明かにせんとするものである。然し唯だ單に言語の上のみから思惟を論せんとし、或は論理的、規範的の法則のみからは去らんとするのは吾々の思惟經驗を明かにすべき十全の態度ではない。それよりも吾々の直接經驗としての事實としての思惟の性質を直ちに捕捉しやうとする其の心理學的研究が其等と同時に、否、其等に先だつてなされねばならないといふことは言ふ迄もない。

然し乍ら思惟の心理的研究の前には困難な道が横たはつてゐる。多くの岐路と障害とが見出される。一步を誤まれば偶然的な勝手な自己觀察に陥つて捕へ所なき概念の排列に終るであらうし、他の一步を誤れば得る所なき概念聯合の法則を確かめるに止るであらう。先驗的認識論と表象機制説とに狭まれた吾々の道は細く而して長い。吾々は今猶ほ此の前途遼遠の道を辿りつゝある。此處に述べやうとするのは其の細道の岐路と障害の思ひ出である。と同時に又吾々が是から進まうとする前途の暗示でもある。

此の困難な思惟の心理的研究の道を始めて開いた人として吾々は、マルベ^(一)を擧げることが出来るであらう。其の研究方法の上に於て、又其の學説の上に於て確かに彼は從來の心理學の中に一方向を開示した。從來の實驗心理學の取扱つて居た聽覺、視覺、空間、表象、等の比較的簡單なる精神現象とずつと超えて思惟、判斷と云ふ最も複雑にして高尚なる現象に手をつけたといふことは寧ろ大なる冒険であるとも言ひ得る。従つて是に用ゐらるゝ實驗方法も多少の變容を受けざるを得ない。とは云ふものゝ彼が用ひた實驗法は驚くべく簡單である。例へば二十五瓦と百十五と

の二つの同じ大きさの圓筒を示して何れが重きかを判断させ、或は二百四十四振動の音叉を鳴らして後に其と同じ高さの聲を出さしめ、或は又三つの明度を異にする灰色の紙片を示して其の中の最を明るいのを注視せしめた。而て其の實驗の後に必ず觀察者(被験者)の内省を聴取したのである。

かゝる方法に基いた實驗の結果、マルベはどう云ふ結論に到達したであらうか。といふと其は要するに消極的な断定に過ぎなかつた。ある對象に就いての判断が正しいとか正しくないとか、言ひ換えれば其の判断が對象の關係と一致して居るか居ないかといふことは實驗心理學的研究の能く判定し得る所ではない。宛も他と比較もしないで單一なる對象だけを見ては其が大であるとも小であるともにはかに断定出来ないと同様に經驗の單なる心理的研究だけを以てしては判断の特質を明かにし得ない。元來吾々の全ての經驗は判断になり得るのであるが然し無論全ての經驗が悉く判断であるのではない。經驗が判断となるにはかならず條件がある。ところが彼の研究に依れば心理的條件は一つも見出すことが出来なかつた。強ひて言へば表象相互の一致關係を意識的に見出すにあると言ひ得る。してみると吾々の經驗が判断となる爲には必ずや他の非心理的の條件を俟たなければなら

ぬ
〇(二)

マルベは結局かゝる消極的な結論を導き出したに過ぎなかつた。然し乍ら彼の研究が興へた反響は目凄しく其の後續々思惟の實驗心理學的研究は發表せられ此の風潮は一時心理學界を風靡した。その中でも特に此のマルベの消極的結論に注目し、彼の研究法の反省より出發して最も徹底的な結果をもたらせて、これ迄の數多くの思惟に關する心理學的研究に一段落をつけたのはビュラーである。

一般に思惟の經驗なるものは極く複雑な過程である。従て其の分析研究が非常に困難であると考へられて居る結果、思惟過程の觀察には常に最も簡單明瞭な判斷や極く卑近な日常茶飯の思惟を以てせられて居る。所が抑々觀念聯合の經過と純粹の思惟過程とは吾々の經驗に於ける二つの極限點ではないか。若し然りとすればマルベのやうに極く容易な簡單な判斷の觀察を以てしては其が餘程精細な微妙な注意に依らない限り往々にして思惟の特質を捕え得ないであらう。マルベがあのやうな消極的な結果しか得られなかつたのは是に基くのではあるまいか。^(三)ビュラーはかう考へて、比較的困難な多少深い思惟を研究の對象とする必要を説いた。彼に言はせると、かく複雑困難な思惟をなさしめるのはマルベのやうな單簡にして

殆ど思慮を要しない判断をなさしめるのに比して、實驗上、殊に心理學の實驗として非常に有利である。實際、誰でもかなり思慮を要する問題が與へられると、或はよそ見をしたり或は身體を動かしたりする事なしに自分の精神的のエネルギーを全然その問題の考察に集中しなければならぬ。所が之に反して、さ程でもない極くた易い判断をする場合には、觀察者は勿論其に注意を集中して熱心に其を解く事は解くが然し其は特にそうする必要があるからである、即ち今は思惟を研究しつゝあるのである。自分はその實驗の觀察者としてさうするのが當然の仕事であり義務であるからである。言ひ換へれば自分は實驗に於ける觀察者であると言ふことが意識されて居るからである。此の如何にも實驗してゐるのであるとか、自分は觀察者であるとか、明瞭に意識されると云ふことは心理學の實驗に於て最も忌むべきことの一つである。なるべくさういふ實驗といふが如きわざとらしい意識を起さないで出来るだけ自然的に能ふ限り虚心平氣な態度で従事することが心理學の實驗の一つの理想であると共に大切な條件である。無論かゝる意識を絶對的に除くのは不可能かも知れないが出来るだけ其に近い方が實驗として價値あるものでなければならぬ。さうして見ると觀察者をして難解な思惟をなさしめる方が勝れた實

驗法であると言ふことになる。た易い判断であると氣が散り易く従て今記したやうな意識が起り易いが困難な問題を課せられるとそんな意識の起る暇が無い。此の點に於て吾々はごうしても後者を選ぶ必要がある。かうした意見から彼は誰でもかなり考へ込まねばならないやうな問ひを發して觀察者を考へしめ又その内省を發表せしめたのである。

猶ほピューラーの研究には今一つ重要な特徴がある。マルベとかメッサとか其他多くの人々は何れも思惟を研究するに當て判断であるとか概念であるとかに就いて考察を企てた。吾々が思惟する際に經驗されるのは概念、判断又は終結であるに相違ないとして特に判断又は概念などの心理的條件を探つたのである。而て是は其自身として何等非難すべきではない。然しながら其の論理的経路は必ずしも難すべき點の無いではない。所謂判断とか概念とかは論理學上に於てはさうであらうが思惟過程の心理學的研究に於ても同じ様に果して特殊の觀察を要求すべきものであらうか。若し假にさうであるとしても、かゝるものゝ心理的觀察が論理學上に於ける其と同等の重要な意味を持ち得るであらうか。其は少くとも疑問であると言はねばならぬ。吾々としては寧ろかゝる論理學に於て認められて居る

概念規定に従ふよりも更に其の前に溯つてもつと一般的な根本的な思惟の經驗その物を先づ確めてかゝらなければならぬ。概念とか判断とかの心理的條件を明かにする前に先づ吾々が物を考へる時には一般にどう云ふことが經驗されるかを知る要があるのではないか。かう云ふ考に基いてビューラーは廣く思惟經驗一般の性質をたづねたのである。

以上述べ來たれる如き研究方法に従ひ、又かゝる研究方針の下にビューラーは如何なる收穫を得たかと言ふに吾々は何等特別に他と異つた新しい結果を見出すことが出來ない。其はやはりマルベに始まつてワット、アッハ、メッサ等の得た所のものと何等根本的に異なるものではない。その用語こそ違へ、ビューラーはやはり彼等の主張する非直觀的の、即ち感覺表象乃至は感情にも歸すべからざるものを以て思惟をして思惟たらしむる所の最後の構素なりとしたのである。

多くの心理學者は思惟經驗を表象に歸せしめた。就中、言語の表象、其は或る時は視覺的、聽覺的の表象である場合もあらうし、或る時は運動の場合もあらうが要するに言語、文字の表象に還元せしめて居る。中には又、かゝる表象のみには歸すべからざる何物かを認めて居るが其は明確に是と指示すべからざる何物かである。即

ち明瞭に意識されないもの、要するに無意識的のものであるとする。此の如くして、思惟を表象に歸せしめずんば無意識に逃れて以て是を説明して來た。然しビューラーに依ると、其の何れも正肯を得たるものではない。言ふ迄もなく觀察者の内省の多くは言語文字の表象が如何に大なる役目をなして居るかを明かに示しては居るが然し表象は斷片的に孤立的に偶然的に意識に現はれるものであつて其が固く結合した持續的の思惟内容の支持者であるとは考へられない。殊にある報告は何等表象的痕跡を認め得ないものすらある。然し此の報告に就いては異論が起るかも知れぬ。即ち表象に就いての報告の見えないのは觀察者が其を忘れたか又は何等かの表象を経験したのではあるが餘りに微かであつたが爲に氣が付かなかつたのであつて、やはり思惟は常に表象を伴ひ、結局表象に歸せらるべき物ではないかとの論難が起り得る。實際此の説の如く觀察者が表象的要素を見逃したり、或は其に就いての報告を落したる様な場合はあり得るけれども、此の報告はさうではないといふ言はねばならぬ。と云ふのは、若し思惟が表象に歸せらるべきものであり、思惟の本質的の部分が表象に依て興へられて居るとしたならば、此の報告表象の痕跡を少しも見出し得なかつた此の報告は支離滅裂の、其の意を解するに苦しむ如きもの

であらねばならぬ。所が事實は全く是に反する。表象に就いての報告は無くとも観察者の思惟過程は瞭然たるものがある。さうしてみると、表象は思惟に缺くべからざる要素なりとは言へなくなる。思惟を表象に還元して是を説明することは出来なくなる。表象が論理學上に於ける所謂「意味」なるもの、心理學上の相關者なりとすることは出来ぬ。

一方、思惟の要素的過程を以て無意識に歸着せしめんとする試みも亦、その當を得たるものではない。思惟經驗は是を無意識的要素に依て説明せんには餘りに明確であり意識的である。吾々の思惟過程は決して半意識的の漠然たる經驗ではない。かくして遂に思惟の特性を他の要素より派生的に誘導し來らんとする企ては全て誤謬に陥るの外はない。思惟の經驗は其自身獨立し統一した一全體である。その中の要素其以上分析すべからず況や他に歸すべからざる最後の經驗統一をビューラーは「考想」(Gedanke)と名けて居る。(四) (假に考想と譯しておく) 丁度、他の人々が或は「識態」或は「覺」など、名けたやうに。其の命名の如何は兎に角として、彼も遂に思惟過程の中に一種の心的要素を確認することに依てマルベ以後の思惟の研究の主張を裏書したのである。

然らばかゝるものは如何にして研究するか。

彼は考想の性質を明かにすべき三つの手段を數へる。第一は多種多様の思惟を綜合して其の特性を抜き出すもの、即ち考想の特徴記載法であつて彼は之を最も重要な方法とする。言はゞ思惟の靜的分析法であるが第二は之に對して動的分解法とも云ひ得べきもので考想が意識に成立するに至る迄の經過を追躡する方法であり、第三は過去の思考を追想する想起研究である。吾々は今此等に就いて一々紹介するの要もないが此處に最も興味のあるのは第一の考想の特徴記載に於てビューラーが考想の型なるものを擧げた點である。彼は觀察者の與へた多くの内省報告の中から特に著しい思惟經驗の群を三つに分けて是に規則意識關係の意識及び志向 Intention と名けて居る。然し此處に注意すべきことは之は決して思惟の對象に依る分類ではなく思惟の經驗その物の分類であるといふことである。思惟の對象と思惟の經驗とは必ずしも一貫した平行關係を保つものではないといふことである。例へば規則意識とは物理學の引力の法則などの如き法則を意識するに名けたものではなく、法則的の意識である。即ちかゝる場合には一般にかうなるものだとか「さう云ふことは有りさうなことだ」とかの意識である。法則なるものを意識する

のでなく意識そのものが法則的になれる状態である。其他關係の意識及び志向の各考想型に就いても同様のことを言て居るが今は述べない。

ビューラーの採り來た道を此處まで辿つてくると吾々は思はず是から先に行き着くべき點を想つて脚を止めざるを得なくなる。彼の言ふ考想なるものは表象を伴ふ場合もあるし伴はない場合もあり得るが何れにしる其は吾々の思惟經驗を直接に、心理的に分解して得た要素である。而て其の有する特性の一つとして關係の意識や志向を數へるといふことになる。吾々は自づと彼の布伦タノーの系統を引いた一派の考方を思ひ出す。物理的現象に對立した心的現象の根本的特徴と考へられた對象の志向的内在 *die intentionale Inexistenz des Gegenstandes* なる語に思ひ至るのである。ビューラーの此の傾向を以てすれば或は此の所謂「内容」と作用の心理學を去る遠からざる所に到着するのではないか。否一般に「ブルツブルグ派」の心理學が結局かゝる點に行き着くものではなからうか。吾々はそんな氣がしてならない。而てかゝる傾向に於て彼等の中でもビューラーが最も徹底的であることは明かである。之が更に徹底して愈々そこに一種の作用と内容の心理學が出来上つて其の結果「ブント」の系統を引いた「正統派」の心理學と「布伦タノー」一派の其との接

合點とが見出される様なことが無いとも限らないが其は餘りに突飛な滑稽な空想到に過ぎはしないかと思はれる。其の事と關連して近來の心理學の客觀的傾向などを合せて考へると多少の興味が無いでもないが其は餘りに樂天的な青年の夢に過ぎないであらう。其等は結局何處まで行つても會合の點なき、寧ろ進めば進むほど互に相去ること益々遠き二つの道なのではなからうか。出發點は同じ心的現象でありながら互に立場を異にし、互に其の進路を異にする二つの道なのであらう。少くとも其等の間には随分甚しい隔りのあることは確かである。而て正統派の心理學のみが必ずしも唯一の道ではない。と同様に作用と内容の心理學のみが必ずしも唯一の意識學ではない。何れも其自身として存在の意義を持つものである。唯だ何れか一方の道を探りて出發しながら半途に於て輕々に他の道に入らんと欲するのは最も忌むべきである。一か然らすんば他の一か、何れかを探りて徹頭徹尾一貫すべきであるし又せざるを得ない筈である。

それは暫くをき、ビューラーの研究方法はゾントの言ふやうに嚴密なる意味の心理學の實驗ではなく似而非實驗なのかも知れない。又テイチェナーの言ふやうに(6)實驗心理の初學者が陥りがちな刺激錯誤 stimulus-error の一種に陥たのかも知れない。

即ち思惟過程を研究すべきであるのに反て思惟内容に捕はれてしまつたと言ひ得るかも知れぬ。若しそうであつたとしてもこゝに唯だ一つの事實、唯だ一つの主張だけは動かすことが出来なくなつた。其は外でもない。今述べた思惟經驗の中には獨異の要素があるといふことである。少くとも是まで考へられて居るやうな表象といふものゝ集積や相互關係を以てしては到底解くことの出来ないあるものゝあるといふことである。而て彼等思惟の實驗的研究者達は之を以て獨立した一つの心的要素なりと考へたのである。ビューラーも亦その勝れた研究方法に依て是を確めたに過ぎないと言ふことが出来る。而て、是こそは數人の人々に熱心と周到とを以てなされた思惟の實驗的内省がもたらした果實の中でも最も美味なるものであると言ひ得るであらう。

然し翻つて考へてみると、思惟過程の中に獨異の性質が見出されると言ふことゝ、是が獨立した一つの心的要素であると言ふことゝは明かに別のことである。例へば表象と云ひ情緒と云ひ想像と云ひ想起と云ふ皆獨特の性質を持つて居る。他と異なつた特徴を具へて居る。それかと言つて直ちに是等を以て心的要素なりとすることは出来ない。其と同様に思惟の特質なるものを以て何の躊躇もなしに別個の心

的要素なりとすることは出来ないであらう。其に就いては心的要素なる概念の審査と所謂特質なるものゝ分析とが企てられた後でなければならぬ。

知らるゝ如く心的要素とは心的過程の經驗的經過に就いて分析と抽象とを試みて最早其以上分析し得ざる最後の點に達したるものである。思惟の心理學者等は先に述べし如く思惟の特質を以て確かにかゝる心的要素である、思惟要素であると主張するものであるが其の點に就いては、にはかに斷定し得ないものがあるやうに思はれる。必ずしも論難の餘地が無いとは限らないであらう。少くとも其は重要な問題たるを失はない。ティチエナーの如きは更に之は運動的又は文字的の感覺表象に還元せられ得べく一般に意味と呼ばれて居るものは種々の種別こそあれ、心理的に之を見れば結局かゝるものに依て代表されて居るものと考へる。此くして思惟要素なるものを認めるか否かと言ふことが結局思惟の心理學的研究の中心問題となるのである。「意味の覺」とか「考想」とかを如何に處理するかと云ふことが根本問題となつて來るのである。

ヴェルツブルグ派の人々の如く思惟要素なる特別の心的要素を認むれば兎に角若しかゝる要素を許さないとすれば此の思惟の特徵は何に依て解決せられるであ

らうか、テイチェナーの如くやはり是を表象に歸して其の觀念聯合的所産なりとして萬事終るべきであらうか。かゝる在來の手法に依ては到底満足することが出来ないといふのが思惟の心理學者の歸結なりとすれば吾々は其に少なからず躊躇せざるを得ないのである。

こゝに至りて吾々は一つの解決の道を見出し得るであらう。其は即ち表象なるものに就いての反省である。實際、心理學に於て表象といふ概念ほどよく用ひらるゝものはない。表象ほど重寶なものはない。稍複雑な現象や少し困難な點に至ると感情を以てするに非んば表象を以て片付けてしまふ。言はゞ表象は心理學に於ける萬能の鍵である。それほどよく用ひられて居りながら、それほど明瞭であるところ考へられて居りながら心理學者の表象に就いての理解は未だ至らざるの憾みがあるやうに思はれる。思惟の問題を解かんが爲には先づ表象に就いての考察よりして出發しなければならぬ。かうした叫びが一二の學者から擧げられるやうになつた。ベッツ(ル)並びにミュラー・フライエンフェルス(ル)の如き是である。彼等は口を揃へて從來極く輕々に考へられ殊に聯合心理學に於て考へられてゐる所の感覺の單なる再生といふ意味に於ける表象を極力排斥する。感覺の再生を以て吾々の精神

生活の内容を説明し盡し得るものとなす聯合心理學の試みは夥しい誤解に基くものと云はねばならぬ。今吾々が何か感官刺激を知覺する場合を考ふるに其際經驗せらるゝ感覺なるものは單なる外部刺激の代表者ではあり得ない。外部刺激の單なる對應者だけを経験すると云ふことはあり得べからざることである。吾々は宛も寫眞の種板の如く刺激を純受動的に受け入るゝものではない。寧ろなし得ない。其をなし得るのは唯だ吾々の概念的の抽象に於てのみである。言ふまでもなく自我は一つの有機體であるから外來の刺激に對しては必ず何等かの反應をなす。全ての外部刺激は常に反應を呼び起す。してみれば吾々がある對象を知覺する時の經驗は刺激に對應するものと自我の反應との複合でなければならぬ。吾々が通常知覺と呼んで居るものはかゝる複合的性質を持つて居る。其の中で後者、即ち自我の反應の全てを彼等は「態度」*Seilungnahme* od. *Einstellung* と名ける。而して態度と言ふも論理學上に於て普通意味されて居る如きものではなく、感情的、運動的内容を指せるものであつて彼等は此の所謂態度なるものに依て即ち感情と運動的傾向との特殊の統合、内面的向性を以て思惟經驗を基礎づけんとするのである。

元來ある時は淀み、ある時はほとばりしつゝ行く意識の不斷の流れを紋切形の固

定的の觀念又は表象のモザイクと考へることは終に何處かに不自然な破綻を曝露せざるを得ないのであるが觀念聯合説の最も主要な誤謬は感覺の純知的なるものを以て想像とか思惟とか想起とかの本質的部分となし感情の如きは殆ど全く顧慮せずして單なる從屬的同伴現象としてしか見ないと言ふ點にある。所が其の感覺の再生としか考へて居られない所の觀念又は表象なるものを吟味して見れば先に述べし如く感覺の再生よりも寧ろ感情運動的の態度なるものが反て重要なる地位を占めて居るのを發見する。ミュラー・フライエンフルスに依れば所謂接近と言ひ類似と言ふ聯合の法則は表象其自身に就いての關係法則と考へられてゐるが實はさうではなくして多くの場合先づ第一に接近類似の感情に示唆せられ引いては、かゝる意志興奮に刺激されて始めて表象の聯合が出來上るのである。従て表象は寧ろ第二次的のものであつて其の主潮は寧ろ上述の感情運動的の向性にあると言はなければならぬ。⁽⁺⁾吾々の表象生活は實に意外にも感情生活である場合が多い。唯だ表象生活は其の表面を暫く蔽へるに過ぎないと言ひ得る。

凡て事物の表象は其自身としては決して正しくもなければ誤ても居ない。其の事物の表象が判断表象となる爲には必ずや他の表象と何等かの關係に立てる場合

でなければならぬ。従てよく言はるゝ如く事物表象が判断表象となるべき條件は廣義の類似關係にある。然し乍ら唯だ單に客觀的に一つの事物表象が他と類似關係にあると言ふだけでは判断にはならないのであつて、其の表象相互の類似關係が經驗者に明確に意識される要のあることは言ふ迄もない。其の相互關係を經驗者が特に意圖する場合に判断作用が出現するのである。かく判断に於ても表象を運用する所の情意的要素、フライエンフェルスの語を以てすれば感情運動的態度なるものが心理的に非常に重要な意味を持って來る。さう言ふ語がもし許されるならば「思惟意志」Wille zum Denken²も言ふべきものを以て思惟經驗の何よりの本質とせなければならぬであらう。

フライエンフェルスに従へば思惟も亦、廣く主觀の刺激に對する反應の一形式である。感情的意志運動的の反動である。思惟も想像も乃至は想起すらも決して單なる感覺の再生ではなく吾々の反應であり態度であり行動である。此等の現象を聯想に依て説明することの及ばざるを見てヴントは統覺なる概念を導入して來たが其の統覺なるものゝ内容は上述の主觀的態度主觀的反應でなければならぬ。感情運動的の向性を意味する概念でなければならぬ。

要するに彼は思惟經驗の獨異性を感情運動的の態度なるものに依りて基礎付けんとした。而て是に依て思惟に心的要素を假定することを避け得たのである。換言すれば從來の如く思惟を觀念聯合によりて説明することも不充分であるし其かと言ひて特に其の中に思惟要素なるものを假想することも無用である。統覺と言ふが如き概念を借り來るも誤解を招き易い。其等よりも更に思惟經驗の事實を着實に反省して以て單なる感覺の再生と考へられて居る表象の内部に之を動かす力強い情意的向性を着眼したのである。

吾々經驗的心理學者が思惟研究に際して採るべき道の中でも此の道が最も正肯を得たるものと言ふべきではなからうか。外に種々の道が有り得るではあらうが少くとも現在の所吾々として進むべき方向は此處にあるのではないかと思はれる無論唯だ主觀的反應の態度と言たいけでは殆ど精神現象の全てを蔽ひ得べき漠然たる概念であるし感情運動的向性と言ふも想像も入れば想起も入るであらうから其だけに依て思惟經驗を説くことは出來ない。従て例へば思惟と創造的想像とを區別して後者が比較的の自由奔放なる自發性に基き且つ著しく具象的なるに反して概念的思惟が目的表象に支配された嚴密な進行をなしながら選擇的の自己活動の

意識を伴ふと言ふが如き極く平面的な記載に止らないでもつと突き込んだ鋭利な解剖を以て思惟の本質に迫らなければならぬし其よりも他面に於ては概念的思惟と言ふが如き精神的活動の中でも最も理知的な現象を其と殆ど正反對の性質を有する感情と言ふが如きものを以て解釋せんとするのは可能性の問題を通り超した言語同斷の言論であるとの非難は必ずや起り得べきであるが其等に對する最後の解決は此處に空虚な論難を列べるよりも向後の新しき研究と人々の公平無私なる内省とが最もよく之をなし遂げるであらう。(一〇、七、一五)

Literatur.

- (1) K. Marbe : Experimentell-psychologische Untersuchungen über des Urteil, 1901
- (2) Marbe : Op. cit. p. 90, 92, 48
- (3) K. Bühler : Tatsachen und Probleme zu einer Theorie der Denkvorgänge. 1907—8 (Archiv für die Gesamte Psychologie Bd. IX & XII)
- (4) Bühler : Op. cit. Bd. IX, p. 309ff
- (5) " " " " p. 316
- (6) " " " " p. 334ff
- (7) Titchener : Experimental Psychology of the Thought-Processes, p. 145
- (8) W. Betz : Psychologie des Denkens, p. 22
- (9) Müller-Freienfels : Das Denken und die Phantasie, p. 22
- (10) " " " " p. 217